2021年度　第３回須坂市子どもの学びのあり方検討会議　会議録

2021年８月24日９:30～11:30
旧上高井郡役所２階多目的ホール１

１　開　会

２　あいさつ（小林教育長）
・本日、3回目の会議であります。前回は「個別最適な学びと自律的な学び」について、学びの主体者である小中学生８名に「私が望む授業　こんな学習をしたい」というテーマで考えを述べていただき、それをもとに、今日お配りしたお手元の資料にあるような意見交換をしていただきました。
・いずれのテーマもこれから迎える少子化や情報化教育のグローバル化、そしてコロナ禍という現実の中で、これからの須坂市の子供たちの教育環境を考える上で欠かせない、重要な視点であることが認識できたと思っています。
・今日は、前回の論議を整理しながら、もう少し個別最適な学びと自律的な学びを進める取り組みについてのご意見をお伺いしたいと存じます。

３　議　事（進行 伏木座長）
（１）前回の議論の整理
（中村学校教育課長）
・まず子供たちからいただいたご意見を８つにまとめました。
・１つ目として「こんな授業を受けたい」という中では、教えたり教わったりできる授業、感動ある授業、嬉しさを体験できる授業等の声をいただきました。
・一方的に教わる授業ではない、自ら参加し心が動く体験、やりがいを感じる授業が求められている。
・２つ目の事業の進め方については、友達からの方が学ぶことが多いと感じる、先生から材料をもらって話し合いたいと等、授業の中で学びを深めたい、発展させていきたいという気持ちが表われている。

・３つ目の「学校でやってみたいこと」では、交流する力をつけたい、他の学校と交流したい。自分が興味を持ったことを他の人にも伝えたいということから、学校というシステムを使って、人と関係性を作っていきたいといことを感じました。
・４つ目の「学校とはどんなところか」では、人と関わり合える、苦手な人とも関わりあえる、知能を発展させる場所等、学ぶ場であると同時に人との関係性を作っていく場所であると強く意識していると感じました。
・５つ目の「先生とはどんな人か」につては、ヒントを与えてくれる、先生がいた方が効率よく学べる等から、知識だけでなく学び方やこれまでの経験を教えてくれる存在として受け止めている。
・６つ目「タブレットの使い方」については、タブレットを使えば、授業で緊張することなく自分の意見を出せる、授業もアプリを使えばわかりやすくなる。一方で、視力の低下、睡眠時間が減ることが心配等、タブレットの利点、限界を冷静に受け止めている。
・７つ目「郷土学習」については、小さいときから須坂のことを学ぶことがあればいいと思う。今までもあったが、魅力に感じる授業ではなかった。それに対して、体験することが大事。思い出を作ることといった提案があった。
・８つ目「小学校、中学校に入学したときに戸惑ったこと」について、小学校の時から学校間の交流を増やしてほしい、というようにもっと工夫する余地があると感じました。
また、クラスの中が狭いと感じたという意見について、押し込められているという感覚なのかと感じました。

・児童生徒との対談後、委員の意見をまとめました。
・「授業について」は、いろんな事を言い合える環境を整えることが大事。どの子も自ら学ぼうという気持ちを持っている。その力を伸ばす方法が必要だと感じる。小学生は五感が大事だと感じた。中学生は効率的という言葉が多かった。弱点補完的な学びが必要との意見がありました。
・「学校でやってみたいこと」では、交流の場作りが大事。公の場で自由に出入りできる場が必要。交流については異年齢や地域を超えた交流が必要との意見がありました。
・「タブレットについて」は、フィルタリングをかけると子どもたちの自律心が下がるという意見がありました。
・「郷土学習について」は、できるだけ早い時期からしていく必要との意見がありました。

・「その他」として、今日対談した子どもたちは大変優れている子たちだと感じた。他の子はどうなのか気になるとの意見もありました。また、地域の人が学びに関わることが必要になってくる。大人との関わりをどうしていくか。一見無駄のように見えるものから子どもたちの学びが得られるような機会をいかに周囲の大人たちが作れるかが大事等の意見をいただきました。

（伏木座長）
・これからの時代、教師はどんな役割なのかっていうことまで考えさせられた時間だった。
・補足というか私の考えとずれているところを指摘しておきたいと思いますが、授業についての委員の意見の中で「オールマイティーな教育をやりすぎていた。弱点補完的な学びが必要」というものがありましたが、「オールマイティーな教育をやりすぎていた」のはその通りかなと思いますが、今、国際社会の求められているのが多様性です。
この弱点の補充的な学び、弱点克服を私共ずっとやって来たような気がするんですが、これはそれに逆行するんですよ。
テストのための弱点克服になっていたのではないか。今は自分の得意なこと、興味のあることを大事にする。
そのことによって自己肯定感が育まれていく。では、自分の苦手なことはどうするのか、それは無理に自分を否定的に捉えて反省し弱点克服をするというのではなく、そのことに強い人、得意な人と繋がる。
自分にできないこと苦手なことは、他の人の特徴を目指して繋がっていく。
そういう人と繋がりある事が今の最新の自律という言葉の定義に入ってきている。
決して弱点克服は悪いわけではない。
苦手なことをあるきっかけを与えて、別の方法を使って、なんだ僕もそれが好きなんじゃないかという気づきもあるかと思います。
しかし、私達は往々にして善意で親心で、受験という関門を抜けていくために、一面的な基準で弱点克服させようとし過ぎていたのではないか。
もっとその子が興味を持てるものを大事にして、自分が取り組みたくなるもの、もしかして苦手なことは他の人と繋がっていく。人に助けを求められる。そして自分の良さを相手に提供していく、そういうことが大事だというふうに我々の教育学部では議論されているところです。

今、中央教育審議会で議論されている個別最適な学びと協働的な学びをどう繋げるかが、その考え方に繋がっているとお考えいただければと思います。

（２）豊野高等専修学校からの具体例の紹介

（豊野高等専修学校　市川校長）

・本校は、終戦直後、集団就職する中卒女子のため「豊野いばら塾」として設立され、75周年。不登校や集団適応に悩む生徒のための高等専修学校として10周年。

・定員は50名。北信の広い地域から生徒が集まってきている。本年度、創設以来、初めて定員を超えて52名となった。

〇不登校になる理由、共通点。

・不登校になる要因は一人一人異なる。

・生徒自身もその理由を理解している訳ではないし、どうしていいかわからない。

・共通していることは、例外なくそのことに苦しんでいる。自分に自信がなく、自分が嫌い。

・相談環境が十分でない学校では、誰にも話せずに独り苦しむ。

・生徒も保護者も将来に対して強い不安を持っている。

・このような生徒たちが本校を選んだ理由。アンケート結果から、専門科目にやってみたい科目があったから。少人数で学べるから。学習内容や進み方がついていけそう。カウンセラーの先生が多くて相談体制が充実しているから。

・入学後の生徒たちの様子について、資料３で令和２年度卒業生の欠席日数と進路状況をまとめています。中学校時の欠席数と比べると劇的に良くなっています。そして、確実に社会に繋がっています。

・この結果について、本校の何が良かったのか。それを考察して、もっと充実していかなければならい。そのことが、この地域で不登校に悩む生徒、保護者のためにもなる。

〇生徒たちが登校できるようになった要因とその取り組み

・１点目は専門コースの存在。

・自分の好きな学習を選ぶ

・集団で学ぶが、個人中心の、いずれも身体を使った学習

・自分の好きなことなので登校意識が刺激される。

・自分のやったことが直接評価され、評価が実感として理解できる。

・すると自分の可能性に気づき、自分に対する自信が生まれる。その自信が新たなものに挑戦してみたいという意欲を生み出す。
・２点目は、少人数の学級編成。令和３年度は52人が入学した。普通の高校であれば２学級編成となるが、本校では４学級編成。集団が苦手な生徒は、少人数制に明るい希望を抱いて入学してくる。２年、３年では学級数を３学級にして大きな集団として、社会につなげていく。
・３点目。Ａ組とＢ組の存在と活用
・本校は高校ではないが、卒業と同時に大学受験が無条件で文科省から認可されている。
・高校卒業資格が欲しい生徒は、本校とさくら国際高等学校の２つに入学して、技能連携により高校卒業資格が取得できるようになっている。
・登校傾向の改善のために、さくら国際高等学校の技能連携を選んだ生徒をＡ組とＢ組の２つに分けている。
・Ａ組の生徒は、本校のみの生徒と共に朝から一斉授業を受ける。Ｂ組は、午前中の一斉授業には出なくてもよい。その代わりにさくら国際高等学校のレポート学習をやる。場所は自宅でも学校でもよい。
・午後の専門コースの時間は、Ａ組と同様にＢ組も学校で授業を受ける必要がある。
・入学後、集団が怖いという生徒や、生活リズムを取り戻すまでの間Ｂ組を選択する生徒がいる。
・さらに、Ａ組、Ｂ組への転籍は年度途中でもいつでも可能となっている。
・４つ目の要因は学習相談の活用。
・学習相談は、入学を希望している生徒（中学生）に国語、数学、英語の基礎的な問題を解いてもらいその結果に対して助言等を行う相談。
・学習相談は２回以上実施して、前回できなかった問題に対してフォローしている。
・学習相談の結果、1回目の結果が不振でも、助言を受けて２回目に結果が伸びることを実感することで、やればできるという自信が付くようになる。
・５つ目は生徒の理解と教育相談の活用
・入学が決まった生徒について、中学校で支援基礎票を作成し、これを元に中学校の先生に出席いただき支援会議を入学前の３月までに実施している。
・ここで出た情報を職員会で、全ての生徒について全職員で共有している。生徒の困り感、好きなこと、得意なこと等、生徒理解のために活用している。

・また、生徒理解のために教育相談を実施している。本校では、生徒が相談したくなった時にいつもで、例えば授業中でも相談員に相談できるようにしている。
・教育相談は、不登校傾向の改善に大きく役立っている。

（伏木座長）
・支援基礎票について、誰がいつ、どのタイミングの作成するのかもう一度教えてください。
（市川校長）
・本校への入学は１月中旬に決まる。その後、中学校に支援基礎票の作成を依頼する。作成は担任の先生を中心に生徒に関わりのある先生にも協力いただく。
・支援基礎票は、入学後も更新されていく。さらに、この票を進学先や就職先でどう活かしていくかということは今後の課題。

（新野委員）
・学校で先生方が実際に困っていることは、どんなことがあるのか。
（市川校長）
・教育相談員を増やしたことで、コーディネーターとの連絡、あるいは担任との連絡が上手くいかずに、担任と教育相談員との間で言った言わないという事が起きてしまった。
・そこで、教育相談の基本方針を定め、相談体制を見直した。教育相談の結果が、担任や教科の指導に生かされていないという反省から整備した。
・教育相談を希望するのは１年生が多い。２年生になると半分。３年生になるとほとんど受けないという事実がある。これは、教育相談を通じて、ちょっとした成功を繰り返すことで、生徒が自分の中にノウハウを身に付けているのではないかと考えている。

（本多委員）
・ICTの活用について、今やられている教育活動の中でどのような構想を持っておられるかお聞きしたい。
（市川校長）
・教育相談の記録方法や閲覧方法について、ICTでもっと効率的にできればよいと考えている。

・現在、生徒からは紙ベースの相談カードを提出してもらっている。しかし、生徒からは、相談カードを取りに行くことも相談とみなされ、相談しにくいというアンケートがあった。
・生徒が教育相談を申し込むツールとしてLINEの導入を検討している。
・大事なことは、担任や相談員、管理職が共有できて、生徒の教育指導に生かせるツールということが本来の目的。傾向と対策、予防ができることを目的としたICT化。
・授業のICT化に関しては途上にあって、他の学校と変わらない。

（３）意見交換

テーマ「特別支援教育の視点から一人一人の可能性を伸ばす取り組み」

（勝山委員）

・通常の学校も特別支援教育も同様に、その人の権利、生きる力を発揮できる場をどう作っていくかということが根っこにある。
・特別支援教育の目標は、携わる教職員の基礎的な理解。家庭や関係機関が連携して個に応じた支援内容と体制づくり。支援情報の共有がとても大事。
・須坂市は市立の支援学校を設置している。県内では初めての取組。
・「困った子ども」から支援があれば力を発揮できる「困っている子ども」へと主語を変える必要がある。
・須坂支援学校や通級指導教室のセンター的役割を須坂市としてどう活かしていくか。
・アセスメント、育ちの評価のやり方。
・上高井特別支援教育コーディネーター連絡会を活用し、上高井支援教育コーディネーターの力量を高める。
・困り感に応じたICTを活用した学習支援と共同学習
・家庭支援（担任やカウンセラー、ソーシャルワーカーの連携）
・支援情報の共有。須坂市ではすこやか支援事業を実施しているが、小中学校ではなかなか情報が共有できない状況がある。就学前から高校まで情報伝達できることが大事。

（伏木座長）

・子供たちの視点から、一人一人の可能性を伸ばす取り組みについて、２人の方から大変貴重な情報提供をいただきました。この問題について意見交換をさせていただきたいと思います。

（市川校長）
・本校の生徒が、パネルディスカッションで自分の意見をきちんと話すことができた理由。自分が言いたくなかったことが言えるようになった。なぜ本校に入ってできるようになったのか考察していく必要がある。
・生徒には、体験学習の際の中学生の案内役や授業のサブティーチャーを務めさせること等どんどん取り入れている。
・本年度の学校教育目標「可能性への挑戦」
・自分が今までちぢこまっていて、気づかなかった可能性に気づかせることを本校では大事にしている。
・生徒が挑戦できる機会を設定する。失敗は絶対に指摘しない。

（山岸委員）
・須坂市も決して不登校の子が少ないわけではない。その中で繋がる、見逃さない、認める、そういうことを日常的に計画的、実態を見返しながら共有できていることが大事だと感じる。
・不登校の子については、支援員や不登校担当の先生、担任が全員で共有しなければならない。

（垂澤委員）
・市川先生のお話の中で一番私が感動した部分は、生徒さんがおっしゃった自分も捨てたもんじゃないなという所が印象に残っています。
・こういった自己肯定感とかやってみたいっていう意欲とかは、繋がりという部分で、人生の根っこを作る幼児期からの多様な体験、そういったものが全て基礎になっていると感じ、て、幼児期の遊びの大切さを感じました。
・弱点を補完的な学びいう部分で、私達教師は、子供たちの欠点とかできない苦手な部分っていうのはすごく見つけることができるんですけど、やはり子供たちの良さ、長所を見つけることが非常に苦手な部分で、欠点が目に付いてしまう。
・そういった中で、私は改めて子どもたちの長所も見つけてあげられるそんな人間でいたいなというふうに思っています。

（伏木座長）

・個人情報という厳しい条件の中で、学校現場では、やりたくてもできないこともあると思うんですけど、小学校、中学校それぞれの事情も踏まえて、この繋がり方、お子さんたちの良さを見つけて情報共有していくことに関して、ご意見ご要望をお聞きしたい。

（佐藤委員）
・小学校では入学後２年間、すこやか相談事業で見ていただいている。情報交換もしています。
・入学時の困り感みたいなところは、そこの中で把握できる部分が大きく有難い。
・来入児は、保小連携で、情報共有をしながら、実際お子さんの様子を見ながら、学校で事前に準備をするようにしています。
・繋がりという点では、お子さんに寄り添った必要な情報等について、やり取りができていると感じている。すこやか相談システムは非常にいいなと思っています。

（島田委員）
・中学校の立場で特別支援教育に関わっていくと、例えば卒業後をどうしていくかというところに意識が向きがちなところがある。そこら辺が小学校と中学校の少し温度差があるかもしれない。
・東地区でいくと比較的小さな規模の小学校があって、少人数の中で、本来大きな集団だったらおそらく不適応を起こしているだろうなという子も含めて、何とか小さな集団の中で自然にやってきて、それが中学校に入ってくると少し大きな集団になり、不適応を起こすことが若干見受けられる。
・小中学校の連絡会等で、1人1人の特徴や家庭環境を情報共有しているんですけれども、どうしてもそこからこぼれてくる部分や、中学校に入ってきてから新たに何か見えてくる部分もあったところで、幼保の頃からの先程話にあったシートのようなもので情報が引き継がれると非常に有難いと思います。
・GIGA スクールになってクラウド上で様々なデータが蓄積されていくことを考えると、子供たち一人一人の学びの持続的な部分も小中高へとうまく引き継がれていくといいのかなと思っています。
・また別件ですけども東地区３校では、この夏休み中に合同研修会を行いました。その中で家庭学習のあり方について討議をしました。小学校では自律的なら家庭学習をこれからどんどん導入していきたいという意向があって、そこで小学校でやってきた子供たちが今度中学

校に入ってくる。そうなると中学校での家庭学習のあり方っていうものも小学校で子供たちがどんな学びをしてきたのかを合わせて考えていく必要がある。２学期以降、家庭学習のあり方も考えかけていきたいなと思っています。そんな意味での繋がりも必要なのかなと思います。

（坂口委員）

・まず記録の繋がりという点で、情報交換の要録を小学校に上げていくということで、保育園側からの情報も限られてしまうっていうのが現実です。

・幼保小連絡会で口頭で先生方と子供の様子や今までの支援だとかをできるだけ丁寧にお話していますが、なかなか口頭では伝わらなかったり、年度当初という忙しさの中、学校の先生も苦労されているのではないかと思います。

・私達も卒園した子供達の育ちをうまく伝え切れていないという現実も感じています。

・記録での繋がり方で何かいい方法が見つけられるとよいと思います。

・特別支援お子さんに関しては、加配保育士をつけていただいていますが、インクルーシブに近い状態で、いろいろな子供たちが一緒に生活している場です。

そのような中で多様性を受け入れる、そして多様性を発揮できる子供たちの育ちを保育園現場で保障し、育てていくという大切さを改めて感じています。

・職員間でも情報共有については苦労しているところですが、これはもう話し込んで、語り合っていくしかないということで、できるだけ時間を作って努力をしています。

（宮川委員）

・先生方がこれだけ一生懸命取り組んでいることについて、PTA会員や保護者にはほとんど知られていないと感じました。

・先生方が一生懸命やっているところに親たちが任せきりになり、無責任になる、人のせいにする、こういった姿を子供たちが見て、いい状態にならない１つの原因ではないかと思います。

・親として、地域としての企業もそうなんですけれども、やはりお任せというか、任せきりになっている。

・広く周知する。やはり発信をしていかない限り、この良さが伝わらない。教育長をはじめ多くの方々がこれだけのベースを作っていただいているということを積極的に発信し、共有できる仕組みを作ってあげることが必要と感じています。

・不登校になった生徒の引き出しを増やすにはカウンセラーの先生の力もあるし、聞き手によって話せる、話せないということをある。２重３重のチャンスで見逃さない、引き出してあげることは先生方に任せる部分と、親も勉強をしていく必要がある。
・どんな世界があるのか、どんな学びがあるのか、色々な人から様々な世界があるということを子供達に対して教えられる環境を須坂でできればいいと考えています。

テーマ「個別最適な学びと自律的な学びを進める取り組み」
（伏木座長）
・個別最適な学びとは、ある意味方法・手段です。それに対して自律的な学びは、私が思うに理念であり目的ですね。自分の力で学べる子供が大人になっていく。そのためにどういう方法が必要なんだろうか。
・これまでは一斉授業が基本。みんなで一緒に学び合うということ大事にしていたのが日本の学校教育。それが多にして個の特徴を潰してきたのかもしれない。弱点克服に傾き過ぎて自信を失っていったのかもしれない。
・今、国が進めている個別最適な学びは、必ずしも個別学習とは言い切れないと私は思う。集団で学ぶために必要だから個別最適な学びの時間を取るということもある。
・また、それぞれの興味関心に基づいて、徹底的に個別最適な学びを進めるということもあるかと思います。
・これまで第１回は幼児教育の観点から、第２回は小中学生の声を聴きながら考えていました。今日は豊野高等専修学校の取り組み、特別支援教育の観点から考えてきました。
・個別最適な学び、自律的な学びについて、これから須坂市でどういうふうに進めることが必要なのか質問や感想等ありましたらお願いします。

（小林教育長）
・教える側の論理から、学ぶ側の論理にしていかなきゃいけない。これはどこの会議でも話題出るが、それは中々難しいこと。
・第１回のこの会議で子供たちの遊びの中に学びの原点があるということを私たちは確認し合いました。
・そして今日、そこで生まれる自己肯定感とか、自分はこれでいいんだってことを大事に、大きくなるまで育てていかなければいけないということになりました。

・自分も捨てたもんじゃないなっていう16歳17歳18歳のお子さんたちが頑張っているわけです。このところを繋ぐべき小中高の学びのあり方では、教える側の論理からの脱着し、学ぶ側の論理に立って共有し、心の中に沈めていくことが、繋がりを次の年代に繋げていくことに結び付くと思いました。

（勝山委員）
・教育長の学ぶ側からの視点で考えていくという話がありましたが、それがキーワードになるのかなと思いました。
・私も特別支援の子供さんの担任をやる機会があって、本当に自分の頭のチャンネルを変えるのが苦しくてわからないっていう経験をしました。
・こちらが提案するとその授業に出てくれない。でも、その子がやりたいことをうまく探してやると自分からどんどん来るようになる。
・自分も教員だったので分かるが、そうは言っても目標があるので、どうしてもそこまで引き上げなきゃならないと思うんですけども、それを引き上げることだけじゃないものにもっと価値がある。そういうことを少なくとも学校から発信していかないといけない。
・子たちが何のためここにいて、何をやりたいのか、それを問い返しているような働きかけがあれば、ICTをどう利用するか等、新たなものがたくさん発見されてくると感じました。

（佐藤委員）
・市川先生のお話を聞いてきて、一番感銘を受けたのは、学校現場では多様性を包み込むことをすごく求められているんですけれど、豊野高等専修学校のお話で、生徒の生の声を出していただいたことで、先生がそれぞれの状況に寄り添ってそれを認め、その子への対応を考えていくっていう、そういう個を大事にした柔軟さみたいなものが学校中に溢れていて、すごいなと思って話を聞いていました。
・自律した学び、多様性を包み込むということで、私もなんとか実践しなければと思って取り組んでいます。
・これまでのこのあり方検討会の中で感じたこととして、子供たちの学ぶ時間や学び方、その子の学びが保障されているということがいかに大事かということと。
・それから、自律といっても１人で学ぶわけではなく、孤独感の中で学ぶわけではなく、共に学べる楽しさとか、安心感が更にその学びを進めるということ。

・また教師の役割として、子ども達が自分たちが困ったときに先生に教えてほしいという思いをすごく持ってる。その学習をマネジメントして、どうサポートしていくかっていう役割が求められている。

（山岸委員）
・市川先生がお話した支援基礎票のようなものはどこの学校でもあるが、ただ違うのは実態を見て作っていく、その子に沿った流れを築き上げていくところ。
・学期の最初に支援シートを作って、反省の時にどうでしたかというだけではなくて、短期のシートが２週間、長くても１か月に１度活用されるようになれば、子供の実態が掴めて有効になると思いました。
・今まで私たちが使っていたことを丁寧に組み替えて、目を向けて行けば、子ども達にもう少し近づけるかなという感想を持ちました。

（伏木座長）
・情報提供として、フィンランドでは保育園、幼稚園の時から保護者、学校の先生、場合によって本人も入って個別支援計画を年２回作成している。
・どういう教育を目指していきますか、どういうお子さんにしていきましょうか、どんなところを強めていきましょうかという支援計画。
・これが年に２回、どこの学校でも全員やっています。個人面談とか保護者性とかはほとんどありません。
・そういう中で、保護者と先生が子供の意見を聞きながら計画に反映している。このような国もあります。

（新野委員）
・伏木先生にお聞きしたいのは、フィンランドのように、子どもにとってどうなんだということを第一義に置いている意識がこの国に芽生えるためにはどうしたらよいか。私達はどんなことができるか。
・教育に携わる方は、教育に熱心に取り組んでいる。
・保護者に対する教育の機会、教唆に富む話に触れる機会が減っている。ネットで見ることに反応するのが精一杯で、何かを考えるということを多くの方が放棄し始めていると私は感じている。

（伏木座長）
・他の国と単純比較はできないのが、私達が学べることは子供を中心に考えているということ。
・私達は子供にとってどういう社会を作っていくのかいうことを他の国に例も求めなくても、私達が考えていくことによって、多様な社会のあり方を具体的に考えられるのではなかいと思いました。

（山岸委員）
・この夏休みに子供達がタブレットを持ち帰ったということで、何か変化はありましたか。

（小林教育長）
・現在アンケートをまとめていますので、また報告させていただきます。
（伏木座長）
・インターネットの危険性や適切な使い方を学ぶためには、危険性やそういうことも同時に学ばないといけない。
・すべてフィルタリングをかけて徹底的に危険なところに入り込ませないっていうやり方をする自治体が多いです。
・それはその考え方なんですが、これから生きる子供たちにはそこのリテラシーも学ばせることも大事だと思います。

４　次回内容について（学校教育課長）
（中村学校教育課長）
・次回は10月6日。信濃小中学校の視察です。
・今回の議論を元にしたシンポジウムを11月14日に予定しています。

５　閉　会（教育次長）
（清水教育次長）
以上で、第３回のあり方検討会議を終了します。